

文献紹介

遠藤由紀子 著

『近代開拓村と神社』

お茶の水書房 2008年10月

286頁 5,600円＋税

本書は、近代国家形成期である明治初期から明治30年代にかけて、北海道開拓地に創建された神社の勧請動向を丹念に検証することにより、入植者の帰属意識の特徴と変化とを解明した労作である。とりわけ著者は、旧会津藩士の入植地ならびに屯田兵村に創建された神社に着目し、広範囲にわたる綿密な現地調査と資料調査とを実施して比較考察を行った。

近代期、北海道をはじめとする国内の近代開拓村や朝鮮半島・台湾などの「外地」ならびに旧満州など多くの地域で神社が建立され、為政者や入植者による神社祭祀が行われた。従来こうした神社は、開拓・植民政策や移民事業の展開過程を把握する中で言及され、あるいは開拓村の社会組織や信仰形態、母村との関わりなどを論じる際に検討の対象とされてきた。しかし本書は、神社の存在を物理的・客観的事実として捉えるのみならず、そこに内在する勧請者や入植者の帰属意識、すなわち神社勧請にこめられた主体的意味を解明しようとした大変意欲的な研究である。

本書の構成は以下の通りであり、その内容（主に2～7章）は昭和女子大学に提出された博士論文が骨子となっている。

序章 本書の意義

第1章 従来の研究の動向

第2章 会津藩士と神社

第3章 旧会津藩士と神社

第4章 札幌地域における士族屯田と神社

第5章 根室地域における士族屯田と神社

第6章 石狩川流域における士族屯田と平民屯田の神社

第7章 北見・上湧別地域における平民屯田と神社

終章 本書の結論

終章では、神社の創立由縁にもとづく考察のまとめとして、近代開拓村と神社との関係および変遷が①藩祖祭神型→②遙拝所型→③屯田兵協賛型

→④記念標型（→⑤村落帰属型）と整理され、この変遷が入植者の帰属意識にも対応すると結論づけられた。①は明治初期かつ敗者と位置づけられた士族の特徴であり、②は明治10～20年代の士族屯田兵村に、③④は平民屯田兵村にみられ、その大半が天照大神を祀るなど国民国家形成期の特徴が見いだせるという。明治30年代には平民屯田の一部で⑤の入植者が固有の神社を祀る形態がみられだが、これもまた国家が戦争を経験する中で、村落への帰属意識が国民意識へからめとられていくプロセスと著者はみている。明治前期の近代開拓村は、殖産興業・富国強兵や欧化主義などの国家政策が直接的に投影されたナショナルな存在であると同時に、開拓村の自然環境や風土、入植者の属性や意識などローカルな文脈によっても特徴づけられる。本書が検証した神社の実態は、こうしたナショナルとローカルとのせめぎ合いが、精神的拠り所としての神社にいかに投影されたのかを力強くもの語る。

本書には神社や記念碑、文書資料等の写真が多数掲載されており、モノクロながらそこに込められた為政者や入植者の地を這うような想いが伝わってくる。なおこれらの写真を拝見していると、神社の様式や形態、祀られた方角などからさらなる意味が見いだせないかと気になってくる。さらに神社祭礼・年中行事なども分析材料になる可能性があると思われる。

最後に本書は、2009年「第32回福島民報出版文化賞」奨励賞を受賞された。本書が明らかにした旧会津藩士の神社にこめた想いは、地元福島県や会津の人びとに一層の重みをもって受けとめられたに違いない。遠く北海道の地に祀られた神社の存在が、時空をこえて場所の履歴と人びとの歴史的記憶とを結びつけた。著者もまた福島県旧安積開拓地ご出身とのことであり、場所に根ざした力強い研究意欲が本書を生み出したのではと想像される。

今後、北海道のみならず国内の近代開拓村の事例や開拓地にいきる人びとの認識像に関するさらなるご研究の進展を期待したい。

（椿 真智子）